

第3章

都市と人種主義

疫病都市

1870年代以降のアルゼンチンでは、鉄道網の発達により短時間で大量の人や物を輸送し、電信電話網の拡大により情報を流通させるテクノロジーが発展しはじめる一方、パラグアイ戦争やフロンティア戦争といったたびかさなる戦争が人の移動を強制し、内陸の経済構造の変容や都市の産業化に刺激されて、牧畜労働者がかなりの規模で大都市に流入した。また、主として南欧や東欧での政治的・経済的情况の変化や混乱により土地を離れたひとびとが、ブエノスアイレスやニューヨークやオーストラリアでなら良い仕事につけるとの噂をたよりに、またアルゼンチンの私的・公的な移民奨励キャンペーンにうながされて、アルゼンチンに大量に流入した。農牧業地域出身でない移民の多くは都市に住みつき、また移民の大部分を占める農牧業地出身の移民も、アルゼンチン政府の土地分配制度の失策ないし無策のゆえにいったん地方に入植しながら諸都市におびただしく流出した。遠距離を飛来するツバメにたとえた「ゴロンドリーナ移民」と呼ばれた出稼ぎ移民が多かったとはいえ、アルゼンチンに残留した移民は1890年の政治的・経済的な危機の年を別にすればほぼ年を追うごとに増え、なかでも諸都市に住む移民の数の増大はめざましく、首都ブエノスアイレスにおいてそれは顕著であった。

こうして、1855年のブエノスアイレス市住民約93,000人のうち、統計上「ネイティヴ」と分類される人口は60,000人で「外国人」が33,000人であったのにたいし、その14年後には「ネイティヴ」は89,600人で「外国人」は88,000人とその数はほぼ拮抗し、1887年には前者が204,000人、後者が228,000人と逆転する。そしてこの32年間で、ブエノスアイレス市人口は4.5倍となり、単純計算でも340,000人の人口が増えたことになる。さらに1895年までに首都人口は660,000人を越す勢いで、この8年間のみで

228,000人近い人口増加を経験し、この段階で、ブエノスアイレス市人口だけでアルゼンチン全国の都市人口の45%を占めることになる(1)。

70年代なかばには、ブエノスアイレス人口の流動化を危険視する言説が警察報告書のなかでも頻繁にくりかえされるようになるが(2)、とくにこの時期に力をもっていたのが疫病都市ブエノスアイレスという言説である。ブエノスアイレス市は数度にわたって天然痘、コレラなどの疫病に襲われ、なかでも約13,760人の死者をだした1871年の黄熱病の流行は衝撃的であった。衝撃的というのは、黄熱病による死者の数それじたいではなく、疫病をめぐる言説がいきなり流通しはじめたことと、そこから都市住民に関するあらたな言説が構成されていったからである。

たびかさなる疫病を畏れた上層階級と生まれたばかりの中産階級は、それまで住んでいた都市南部を捨ててこの時期あらたに建設された都市北部の「バリオ・ノルテ」〔北部地区〕ないし「バリオ・アルト」〔高い地区/上層地区〕に移り住んだ(3)。かわりに特権階級に打ち捨てられた南部の「バリオ・スール」〔南部地区〕ないし「バリオ・パッホ」〔低い地区/下層地区〕に流れ込んできたのが大量の移民労働者で、かれらはかつてブルジョアが住んでいた館を集合住宅に変えてコンベンティージョを形成し、また投機用に細分された土地や荒地に残されたあばら屋、賃貸住宅、木造の掘ったて小屋に住みはじめた。それまでの人口増加による都市の拡大に加えて、都市中央部に住んでいたひとびとが多数移り住んだことでそれまで郊外とみなされてきた地区が、市の行政区内にとりこまれ、結果的にブエノスアイレス市の境界線は、黄熱病流行によって格段にひろがる結果を生んだ(4)。

黄熱病は、都市内部の南/北の住み分けにドラスティックな変化をもたらしただけでなく、都市のインフラストラクチャの急整備をうながした。そうした一連の都市改造や法律制定に専門家としての助言を与えただけでなく、現実に行政の現場に関与していくようになったのが公衆衛生医である(5)。1873年にブエノスアイレス大学医学部に設置された公衆衛生学講座のもとに養成された衛生学のエキスパートたちは、都市貧困層の身体的健康の問題に関与するだけでなく、労働者の労働の場、住居、娯楽施設などでの観察とそこでの活動をつうじて、衛生工学、労働法、社会保障システムの組織化、さらに飲酒や娯楽など労働者の慣習や日常生活の細かい部分への批判におよぶ幅広い領域に参入し提言をおこなうようになる(6)。1883年に書かれた著名なテキスト『ブエノスアイレ

『スの賃借住宅に関する研究』 *Estudio sobre las casas de inquilinato de Buenos Aires* のなかで、国会議員で公衆衛生学講座の初代教授ギジェルモ・ラウソン Guillermo Rawson が述べているように、衛生学者が強い関心を示し足繁く通ったのは、「資本にまったくかえりみられない」ブエノスアイレス市南部、すなわちこれまでは見捨てられ注意を払わずにおかれた周縁部、絢爛豪華な都市のつまらない汚点、管理のいきとどかない微少な細部であった。ラウソンによれば、労働者や貧者の住居ほど公衆衛生に密接に結びついた「社会学的・経済学的諸問題」はなく、それも「困窮者に関係する博愛主義的な視点からというだけでなく、健康や生活と関連するという意味で共同体の諸利益という視点から」、労働者や貧困層の住居は扱われなければならない。もはや個人の隣人愛や慈善ではなく、社会の諸利益を管理し守る衛生学の公的な介入が、そこには必要とされているというのである。労働者の住居について、ラウソンはつぎのようにつづけている。

内部の空気が入れ替えられることはけっしてなく、もっとも怖ろしい病気の萌芽が育成されているあの悪臭を放つ豚小屋から発散物は流れだし、周囲の空気に取り込まれ、おそらくは金持ちの瀟洒な館にまで運ばれていくのだ。

ある日、わたしたちが細心の注意を払い愛情を注ぐ天使、家庭のなかでもっとも愛されている息子が、高熱と重い病いの苦しみにうめき声をあげながら目をさます。母親の胸は心配と苦悩で張り裂けそうになり、すぐさま名医が呼びにやられ、医師は病人の側にあわてて駆けつける。…〔中略〕…この残酷な病気はどこからやってきたのか？ 衛生の処方箋どおり、家は清潔でゆったりとしており、換気も採光も十分だ。食材はえり抜きのもので調理は慎重な監督のもとになされている。前夜まで健やかで活力にみなぎっていた子供の身体がどのようにしてあの突然の体質変容に苦しまなければならなかったのかを説明するものはなにも見つからない。もしかしたら病人は回復し、わたしたちは天に感謝し、医師は幸福に職務を終えるかもしれないが、あるいはその子は死んでしまって家族の心を永遠の悲嘆と空虚に突き落とすかもしれない。しかしながらわたしたちは悪の起源を探查したりしない。かくして状況は前の状態とまったく同じままにおかれ、危険は他の人々にとっても存続しつづけるのだ⁽⁷⁾。

アルゼンチンの医学史家ウーゴ・ベセッティ Hugo Vezzetti の指摘によれば、1870年

代なかばの疫病研究では、疫病は動物や植物といった生物体が原因であり、それが発散する「瘴気」が流れだして風によって都市全体に拡大するものと理解されていた。その段階では、疫病の核に変貌する可能性のある生物体は人間ではなく他の動植物で、しかも市内の方々に散在しており、市内のある一定地域に限定的なものとはみなされていなかった。だが、80年代に書かれたラウソンのこの影響力のあったテキストでは、疫病の核は、生物体から貧困層の住居へ、プエノスアイレスの限定的な片隅へと移動させられたのである。

むろんラウソンの叙述は、労働者や貧困層の差別を助長するために書かれたわけでない。さきのテキストでめざされていたのは、社会改良にまったく興味を示さない大ブルジョアやオリガルキーによって構成される国の支配層に、病気にたいする恐怖の念をおこさせ、安価な賃貸用の住居建設に取り組むようかれらを動員することにあつた(8)。だが、ブルジョアの「エゴイズム」を批判する一方で、病気は貧困層の住居に棲むだけでなく、飲酒や洗顔手洗いの欠如といった貧困層の日常的な「諸習慣」に棲息するとの拡大解釈がなされるとき、衛生学的言説は都市貧困層の監視と囲いこみと飼い慣らしをめざす言説となる。「市の検査官はできるかぎり頻繁に家々を訪れ、もっとも誠実な責任感をもって賃貸住宅の運営条例を遂行させるべく導くことが肝要である」、としたうえでラウソンが提示している賃貸住宅の入居規則にはつぎのようにある。「家族の誰かが種痘を接種していなかったり、なかなか種痘をうけようとしないう者たちの入居は禁じられるべきこと」。さらに、「家賃は週ぎめの前払いで監督官の執務室にて毎月曜日の午前9時から午後6時までに支払われるべきこと」、「通路、便所、洗濯場は毎土曜日に洗浄し、毎日10時前には掃き清めるべきこと。以上は賃借人が交替でおこなうこと」、「午前10時以降に絨毯を叩くなどの作業をおこなわないこと」、「子供たちには階段、通路、洗濯場では遊ばせないこと」、「間借り人は壁に紙を貼ったり、壁を塗ったり、壁になにかを描いたりしないこと」、「ガスは夜11時には閉められ、同時に道路にむいた扉も閉じられるべきこと」、「賃借人は各部屋で出産、死亡、伝染病患者がでた場合はただちに監督官に知らせるべきこと。この条項に従わない者は家をあけわたさなければならぬ」、「騒々しかったり節度のない賃借人はすぐさま家をあけわたすべきこと」等々(9)。

労働者や貧困層は、種痘という健康者の証明を身体に刻みつけられ、1カ所に集めら

れ、細かい時間割にそった集団行動を義務づけられる。軍隊や監獄を彷彿とさせる細かい規則のもと、収容者の身体は、壁紙を貼ることから大声をあげることにいたるまで徹底した監視のもとにおかれ、誕生から死にいたるまで、毎週の賃料支払いや抜き打ちのブエノスアイレス市検察官の訪問をつうじて常に監視されたのである。

宗教者としての医師

病気と重ねあわせられることで、都市労働者の身体や住空間は、さまざまな表象をまとわせるのに絶好の素材へと変貌する。1878年にフアン・マヌエル・ブラネス Juan Manuel Blanes が描いて大成功をおさめた「ブエノスアイレスにおける黄熱病のあるひとつのエピソード」"Un episodio de la fiebre amarilla en Buenos Aires" と題された絵画をみることによろ [図版-6]。ボカ地区と思われる貧民街を襲った疫病の猛威の爪痕がなまなましく残された部屋を、一説にロケ・ペレス Roque Pérez とマヌエル・アルヘリッチ Manuel Argerich とされるふたりの医師が訪れている。おずおずと医師を見つめる裸足の少年は、うら若き母親の死をまだ実感していないのか唇にかすかな笑みさえ浮かべ、煉瓦を敷いただけの汚れた床の上では、死んだ母親から乳をねだって赤ん坊がその胸元をまさぐっている。医師の背後にかいまみえる戸口の外には隣近所のひとたちが群がり、どうやら涙に暮れている様子だ。そして厳粛な死の光景をまえに、医師は帽子を脱ぎ、死者の冥福を祈って黙祷を捧げている。

鑑賞者の胸をうつこの光景は、しかしながら、複数の意味を同時に表象する見事な構成のされかたをしていることに注目しておかなければならない。眼差す医師と眼差される死者の対比は、〈身繕いをしたブルジョア〉と〈乱れた衣服に裸足の貧者〉という社会階級の象徴であり、〈死者の魂を救済する神父=父〉と〈救済を待っている信者=子〉という宗教的な階層の表象であり、〈外の光の世界に住む者〉と〈内の闇の世界に住む者〉という空間的かつ象徴的な表象である。つまり、医師とボカ地区の住民という対比が、〈健康=ブルジョア=救済する者/神父=父=男=光〉にたいする〈病死=貧者=救済される者/信者=子=女=闇〉というくっきりとした二項対立の表象へと分節されているのである。その意味で、黄熱病流行という具体的な出来事の意匠を借りてはいるものの、この絵画は、教訓的な世俗的宗教画にほかならず、しかもその教訓が鑑賞者に求めてくるのは、ジェンダー化された階層性に支えられた卑俗の階級を承認せよ、

ということなのである。

このように、健康な光と病的な闇の対立を、ジェンダー、階級、都市空間の表象にかさねる言説の典型として、1903年1月に医学と犯罪学の専門雑誌『精神医学・犯罪学・隣接諸科学紀要』 *Archivos de Psiquiatría, Criminología y Ciencias Afines* (以下『紀要』と略称) に掲載された「犯罪と売春の生——医学的・文学的諸印象」 "La vida del delito y de la prostitución. Impresiones médico-literarias" をあげることができるだろう。イタリア人移民の父をもつ書き手のフランシスコ・シカルディ Francisco Sicardi は、ジェノヴァとブエノスアイレスで医学と薬学を学び、地方で医療にたずさわったのち首都に戻ってからはサンロケ病院の院長やブエノスアイレス大学医学部の代理教授をつとめるかたわら、小説家を志していた。シカルディが、ブエノスアイレス大学医学部教授の肩書きのもとに書いたこの論文のなかで、ブエノスアイレスは次のような空間として描かれている。

その夕暮れ時をわたしは忘れることができない。ざわめきたつ長い昼が消散していつて薄暗がり雨が降りたち、あらゆるものをすっぽりと包み込む。真っ暗な街区と闇の片隅では恋人たちが逢い引きし、お告げの祈り Angelus [キリストの受胎告知を記念する祈り] が万民のための贖宥を願う祈祷をあげていることを告げる教会の鐘の音が響いているとき、不安な影のような姦婦たち *adulteras* が光乏しい道を通りすぎていく。危険な時間がやってきた。薄暗がりよりはよりいっそう降りたち、あらゆるところでその濃さを増し、そこそこで [売春の] ご商売の灯りがともる。そうして街灯にあかりが入り、道のうえにその影が揺れざわめく。街灯の下を馬車が通りすぎ、路面電車がうなりをあげてレールの上を走り去る。夜空はひどく暗い。星は、あたかも都市での生では何の役にもたたないかのように、そしてあたかも夜の限りなき平和の不寝番たる田舎の孤独を楽しませるだけに創られたかのように、なかなか輝こうとはしないのだ⁽¹⁰⁾。

酔っぱらいや白痴といったこれらのオナニストたちは、ソドムの墮落の賛歌をうたいながら死にむかって行進し、退化した大群となって虚弱な軌跡を残していく。あちらこちらで、あらゆるところで、いまわのきわの喘ぎ声のなか、低い大地は悲惨な家々と不潔な大部屋を混ぜあわせ、壊疽がこうした犯罪の兄弟をさいなみ、娼婦、泥

棒、売春斡旋業者、贗造者、姦婦や姦夫、詐欺師、人殺しといったあらゆる人間的悪臭は、すさまじい章を書きのこして死んでいくのだ。やがて大地は沈没し、すべてのひとびとを死で汚染する。歪んでぞっとするような洗面の頭蓋骨が投げだされているところに、全身を血液膿性の潰瘍に覆われた人間を横たわらせて(11)。

「歪んでぞっとするような洗面の頭蓋骨」とは、かの〈メメント・モリ〉 *memento mori* の形象にはかならない。この宗教的な寓話のような光景のなかで、「低い大地」つまりボカ地区とその周囲の住民の身体は、悪徳や狂気、性病、金銭欲、ふしだらな性愛などのネガティブな意味を指し示す記号へと変えられている。驚くほど過剰に表象が重ねあわせられているこの論文が掲載されたのが、医学の専門雑誌であった事実は、逆に医学的言説のなかで都市貧困層の身体と精神がどのような扱われかたをしていたかを示しているだろう。いまや貧者の道徳心こそが救済されなければならないのであり、それができるのは唯一医者だけだ、というのも、かれらの精神のありようは、それまで考えられてきたように身体という神秘のヴェールに隠されているのではなく、身体の表層にさまざまな徴候として可視化されており、その徴候を解読することができるのは医者だけだからである。こうして、役人であり社会改良主義者であるとの医師たちの自己意識は、いまや宗教的な指導者としての自覚をも獲得することになるのである。

健康の園「居留保護院」

ひとびとが1ヵ所にあつまり、折り重なるように暮らす空間を病理と悪徳の巣とみなす言説は、簡単にその逆像を都市以外の場所に設定する。シカルディのいう「平和の不寝番たる田舎の孤独」がそれである。だからちょうどその同じ時期、ブエノスアイレス市の外部で精神的な病いの治癒をめざすいわゆる「居留保護院」 *asilo colonial* を設置しようとする動きがあらわれたことは、なんら偶然ではない。居留保護院は、囲い込みをいっさい廃したイギリス式のオープン・ドア・システムをモデルにしたもので、アルゼンチンではブエノスアイレス最大のメルセデス狂人保護院の院長を務めていたドミンゴ・カブレー Domingo Cabred によって1899年以降導入された(12)。

1908年、カブレーは、ブエノスアイレス州ルハン区域の地方狂人居留保護院の着工にあたって、大統領を筆頭に大臣その他ブエノスアイレスの紳士淑女の居並ぶ前でおこ

なわれた演説のなかで誇らしげにこのようにいつている。「このあらたな保護院は、水路にかこまれた234ヘクタールのきわめて肥沃な美しい牧草地に建設され、いくつものばらばらの棟によって構成されることになるでしょう。これらの棟は、アルゼンチンの気候条件に適した小さくて簡素で居心地のよい別荘の形をしており、庭の真ん中に分散した配置で据えられるので、全体としてみると、ピクチャレスクな小村落 *un pintoresco pueblecito* のような印象を与えることになるでしょう」。カブレーの説明によれば、保護院は5つのセクションからなり、各々が幅広い道路で分けられている。患者は入院にあたって管理部で検査を受け、どの程度の〈異常性〉をもつかによって分類され、学校や体操施設や教会などが設置されている棟に送られる「教育可能な者」と、奥深くに配置され「治療と看護」を必要とする「重度の狂人」などに分類される。これに、酪農場、鶏と豚の飼育場、耕作地、調理場、機械室等が付随しているという(13)。

都市住民の混沌した居住空間とは対照的に、保護院の居住者にたいしては分類と弁別が徹底され、計画的に分散させられ、シカルディ流の「田舎の孤独」に囲いこまれる。重症患者をのぞけば、他の入院患者には学びと祈りと労働の場が与えられる——というより、強制されるのだ。労働はどれも農牧業を主とした肉体労働で、日中の労働に精を出すことによって精神的な治療がはかられようとしている点でも、性労働などのように夜の密室内での労働を転倒したものになっている。

それにしても、この保護院をカブレーが「ピクチャレスク」と形容しているのは示唆的ではなかろうか。前章で述べたように、自然の無秩序を飼い慣らし手懐けて調和させる装置がピクチャレスクであるとするなら、この保護院のピクチャレスクは、ブエノスアイレスの貧困層の空間という圧倒的な無秩序の〈自然〉が発見され、それを管理して秩序だてようとする医学的な技術のなかから生まれてきた眼差しの装置と考えることができるからである。そしてこうした空間に人間精神の無秩序な〈自然〉を代表する狂人をかこいこんでいるかぎり、カブレーの演説に耳を傾けている大ブルジョアジーにとって、もはや病いがなんら脅威を与えるものではないことを、「ピクチャレスク」の一言は示唆しているのである。

それをもっとも如実に示しているのが、1918年に出版されたカブレーの『演説集』に収録されている描き手不詳の居留保護院眺望画であろう〔図版-7〕。『演説集』には、ルハン区域だけでなく、コルドバ州の居留保護院、チャコ地方の病院やサナトリウ

ム等の着工にあたってカブレーがおこなった演説が収録されており、そのすべてに施設の彩色眺望画が付されている。強烈な原色をいっさい排してパステルカラーに統一された全体の色調といい、陽光に満ちた広大な大地や広々とした大空といい、そのほとんどがルハン区域の眺望画と似たり寄ったりの特徴を備えている。

このルハン区域の絵では、ほどよく調節された光のなか、中肉中背の男たちが、簡素で清潔そうな青色の作業服と白い帽子を身につけて労働に励んでいる。1カ所に集まることなく、個々ばらばらに、監督者もいないのに、自分の役割を果たすべく脇目もふらず一心不乱に労働に精をだす。あたかも道路の両脇に数メートルおきに規則正しく配列された木々のごとく、収容者の意識は規則正しく自発的労働へと差し向けられているのだ。ここには、収容者の肉体的な逸脱や精神的な逸脱の徴候も、またかれらを取りまく自然環境の常軌を逸した激変の徴候もなく、すべてが馴化されたコンフォートの理想郷が描かれているのである。だが、それが収容者にとってのコンフォートではなく、監視している側にとってのコンフォートであることはいままでのない。フーコーがいついかに、規律訓練の権力は、監視されている者の身体をさらけだし可視化する義務をかれらに課し、その一方で監視している側は見えないままにおくことによって、監視されている当の本人たちに、自分たちは常に見られているのだという意識を内在化させることをつうじて完遂されるのである⁽¹⁴⁾。居留保護院のような強制的な労働の場において、自発的な労働は、見られているという意識が内在化することによって可能になる。外部からの強制によっていやいや労働させられているひとびとの姿は、いつかれらが外部の監視者にむかってくるかわからないという脅威を監視者に与えるが、このような自発的労働はそうではない。ここでは監視者にこそコンフォートが約束されるというのは、その意味においてである。

いいかえればこの絵は、居留保護院が、18世紀に発見された自然の崇高な無秩序と、19世紀に発見された人間精神の潜在的な無秩序をともに飼い慣らす装置であることを示すと同時に、収容者自身によって労働規範が内面化され、見事な一望監視システムとして機能することを予告しているのだ。人間精神が飼い慣らされれば、物理的に施設を囲い込む必要はなくなる。囲いはそこで働く労働者の精神の内部に存在しはじめるからである。逆説的ながら、カブレーの導入したオープン・ドア・システムとは、収容者の精神を規律でがんじがらめにする見えざる囲いの象徴なのである。

また奇妙なことに、保護院の構成要素は、ことごとく半世紀ほど前のサルミエントの主張のパロディになっている。『ファクンド』のなかでサルミエントは、だだっ広い空間、都市の外部での人間の孤独、頭脳を用いず腕力しか必要としない牧畜のような産業こそが、ガウチョの野蛮で不道德な精神をはぐくんできたのであり、その精神がアルゼンチン国民を墮落させているといていた。それから50年近く経ってみると、サルミエントがあげている要素はすべて、不健全な精神に健康をとりもどしてやる手だてとして用いられるようになるのである。

こうした諸価値の転倒をもたらしたもののひとつが、都市社会をめぐる問題の発見にあったことはいうまでもない。念のためにいっておけば、現実の都市の変容や地方の変化が直接的にこうした転倒をもたらしたわけではない。移民流入による都市の人口増加が1880年代以前になかったわけではないし、疫病にしたところで黄熱病以前に何度も流行し、またシカルディの論文にあるような娼婦の姿も、それ以前に存在していた。問題は、現実社会の変容それじたいというより、その変容をめぐる言説編製のほうである。つまり、1862年にアルゼンチンが統一され、輸出経済体制が確立して世界市場にアルゼンチン経済が組み込まれ、ブエノスアイレスを中心に四方八方へのびる鉄道網が整備されるにつれて、アルゼンチン唯一といってよい輸出入の玄関口ブエノスアイレス港の重要性がそれまでとは比較にならないほど増大し、1880年には州から独立して連邦首都と定められたブエノスアイレスには地方のオリガルキーの子女が移り住み、かれらが世界有数のオペラハウスであるコロソ劇場やモリーノに代表される豪華な造りのカフェに集う光景がそこで見られるようになるとき、つまりはブエノスアイレス社会が政治的にも経済的にも重要視されはじめ、そしてなによりオリガルキーやブルジョアジーの実際の住空間となる時、それまでは見過ごされてきたことがらが問題とみなされるようになってきたのだ。

また、都市を問題とみなす言説を正当化し、補強するための〈数値集め〉も、この時期からさかんにおこなわれはじめた。1870年代以前にはおこなわれていなかった疫病統計、犯罪統計、狂人統計といった統計が開始され、数の精緻化をはかる技術が発達していくにつれて、それまで見すごされてきたものまで統計数字に組み入れられ、当然のことながら年をおって病気や犯罪は〈増加〉の道をたどった。さらには、それまでさして気にもとめられてこなかった軽微な犯罪や狂気の徴候を見いだし管理し収容する監視体

制が強化されていったことによって、統計数字は〈増加〉することになった。そしてこうした数字の増加が、あたかもブエノスアイレス社会の状況の悪化を〈客観的〉に示す指標であるかのごとくにひとり歩きしはじめたのである。なかでもこれらの統計数値の〈増加〉に貢献することになったのが、20世紀初頭、ブエノスアイレス大学を中心に一斉に開花した犯罪学ないし犯罪人類学であった。

〈西洋〉を超える犯罪学

犯罪者は生まれおちたときから犯罪をおかす素質を宿しているとする〈生来性犯罪者〉説をとなえて、一躍時代の寵児となったイタリアの犯罪学者チェーザレ・ロンブローゾ Cesare Lombroso の〈理論〉が喝采を浴び、その後賛否双方の激論をひきおこしながら、犯罪学の領域をきりひらいていく出発点になったのは、1885年にローマで開催された第1回犯罪人類学国際会議であった。アルゼンチンは、ラテンアメリカで最初にこの新しい〈科学〉をとり入れた国である。国際会議の2年後、ブエノスアイレス大学法学部では、1885年の国際会議での実証主義的な提起を全面的に支持するとの宣言がなされ、これをうけるかたちで、翌年、司法人類学協会 *Sociedad de Antropología Jurídica* がブエノスアイレスに設立され、さらにその翌年にはブラジルでも同様の協会が興されて、アルゼンチンとブラジルは19世紀のラテンアメリカにおける犯罪学の中軸を形成した。実証主義的犯罪学への言及は、1889年にはメキシコで、1890年にはコスタリカで、1892年にはチリの諸大学の教育現場でなされるようになり、1899年には犯罪人類学と身体測定学の講座がキューバのハバナ大学におかれるようになったが、犯罪人類・社会学 *Antropología y Sociología Criminal* として大学の正規講座がおかれたのは、これもまたアルゼンチン（1898年）が最初であった⁽¹⁵⁾。

イタリアの亡命アナキスト、ピエトロ・ゴリ Pietro Gori が1898年に創刊し、4年で廃刊になったアルゼンチン最初の犯罪学雑誌『近代犯罪学』*Criminología Moderna* をひきつぐかたちで発行されはじめた『紀要』は、フランスの『犯罪人類学紀要』*Archives d'anthropologie criminelle* に匹敵する雑誌としての自負を後世のアルゼンチンの犯罪学者たちに与えた⁽¹⁶⁾。この雑誌の初代編集長の座にあったホセ・インヘニエロス José Ingenieros は、すでに創刊号の巻頭論文のなかで、アルゼンチンないしラテンアメリカはヨーロッパの諸学派にまさる新たな視点を提示することになるだろうと宣言したのであ

る。

インヘニエロス、ロンブローゾに代表される初期のイタリア学派は犯罪者の「形態的」な側面のみ注目し、他方それに対立するアレクサンドル・ラカサーニュ Alexandre Lacassagne などフランス学派は「社会的」側面しか見ておらず、両者ともに極端な学問上の「愛国心」にとらわれているだけだと断罪したうえで、なにより重視されるべきは犯罪者の「心理的」側面、とくに「精神病理学」的側面を分析すべきだと主張⁽¹⁷⁾。そのうえで、犯罪学という歴史の浅いディシプリンのなかに、ヨーロッパ学派から自立したあらたな学問潮流をきり拓く力は自分たち南米大陸の学派にこそ存するといいはなった。『紀要』全体の「プログラム」でインヘニエロスはこのように宣言している。

この『紀要』は、個人的・社会的な精神病理学の諸現象が南米大陸において呈する特殊な諸範疇を確立し、そうすることでヨーロッパの諸研究を完成させようとするものである⁽¹⁸⁾。

過剰なほどにロンブローゾにたいする批判をくりかえしたり、『紀要』のなかで批判的な書評を展開し、あるいはまたイタリアやフランス以外にスペインやアメリカ合衆国、ベルギー、イギリスからの論文を掲載するといった学問潮流の全方位性をうちだしたのもさることながら、ブラジル、キューバ、チリ、メキシコ、ペルー、ウルグアイ、ボリビア、コスタリカ等、他のラテンアメリカ諸国からの論文を積極的に掲載している理由。それは、「個人的・社会的な精神病理学の諸現象が南米大陸において呈する特殊な諸範疇を確立」することをつうじて、ヨーロッパの諸研究から独立した領域をきりひらくための場として『紀要』を位置づけるためにほかならない。ゴリとインヘニエロスの連続性やロンブローゾ学派の圧倒的優位性を強調する後世の犯罪学者たちの言述にもかかわらず、イタリア学派の徒ゴリに率いられた『近代犯罪学』の流れを継承しようとする身振りは、インヘニエロスの筆による巻頭論文にも、『紀要』の裏表紙に毎回掲げられることになる「プログラム」にも存在しない。むしろ逆に、『紀要』創刊は、ひとつの切断の身ぶりだったのである。

巻頭論文のなかで、「異常者」の分析にさいしてその〈心理〉を強調する潮流を「犯罪学のあらたな学派」としたうえで、「それは〈精神病理学派〉と呼ばれるべきだ」と

宣言することによって、インヘニエロスが犯罪学のなかにひとつの領界を画し、定義し、命名し、ひいてはそこにひらかれる論争領域を他に先んじて占領し、みずからのものにしようとした。そこには、3年後にローマで開催される国際科学会議に出席したインヘニエロスが、ヨーロッパの学者を批判するなかでとっている、論争的で独立した観察者としての位置を構築する身ぶりや、ブエノスアイレスでの帰国歓迎パーティの席上で表明することになる「国民的な科学」の構想への意欲、その「国民的な科学」が世界的=普遍的に承認されることへの希求が先取りされているのである(19)。ここには、学問的独立の宣言、ないしは学問的営為における〈被植民者〉側による主体性構築への意志がはっきりと示されている。だがなにより重要なのは、このような「あたらしい学派」の構築への意志が、「世界初」であったり「世界でも例外的」であったと自負される、社会監視と排除のための学的営為や制度的装置の形成をうながしたことである。刑務所と警察というふたつの抑圧装置とのタイアップというかたちで、それは実現された。

そのひとつが、1907年にブエノスアイレスの国立刑務所内に創設された「世界初」の犯罪学研究所 Instituto de Criminología である。インヘニエロスは、刑務所長アントニオ・バルベール Antonio Ballvé が「心理学の役所」と呼んだこの研究所の初代研究所長に任命され、研究所のアウトラインをつくるなど創設から深くかかわりを持ち、犯罪者を対象とする諸学問間のネットワークの総体としてこの研究所を構想した(20)。かれの構想によれば、研究所は、まずもって犯罪を特定する諸要因についての研究が営まれる「犯罪因学」と、「犯罪因学」をすすめるための素材を発掘し提供するために、犯罪者のさまざまな反社会的行動の分析や犯罪者の個別的臨床をおこなう「犯罪臨床」と、さらには犯罪予防のための諸制度や司法への応用や刑務所システムを研究する「犯罪治療学」からなる、「犯罪学臨床」の場と定義された。「犯罪因学」で得られたデータは「犯罪治療学」での予防的法律の基準の土台づくりに利用され、また「犯罪臨床」で抽出されたデータは刑務所制度やその体系の組織化を方向づけるために参照されるというものである(21)。

相互に参照し協力しあうこの緊密な学問上のネットワークの体系が、〈既往症〉—〈診断〉—〈予後〉からなる医学モデルにその規範をとっていることはいままでのない。こうした医学モデルを社会に応用する実験はすでに衛生学のなかで実現されていたとはいえ、システムティックな学問機関としてひとつの場を与えられ、行政当局と社会

的機能を分担しあいながらも、当局にたいして自律的な言説空間を構成しようとしていた点で、犯罪研究所はきわだっていた。「犯罪学研究所は、司法的機能や刑法上の諸機能をもつことはなく、純粋に調査研究に専化した諸機能のみを帯びるだろう。それは司法の諸機能を侵害することのないひとつの実験室、ひとつの診療所となるのであって、もろもろの現行法の施行のいかなる妨げになることもなく、刑法のきたるべき進歩に協力するための諸要素を収集するであろう」(22)。このように述べることで、学的営為は司法その他の機関と相互不可侵な棲みわけを実現しなければならず、犯罪研究所は当局から独立した自律的な学問の牙城でなければならないとインヘニエロスが主張した。

だが、研究の場としての純粋性を強調し、既存の法や機関のなわばりをあらすことのない無害な中立性を装うそぶりをみせてはいても、実際には、「来たるべき進歩」のために「協力」という名分のもと、現行法の施行されている法の現場に研究所が介入していく回路は開かれていた。実際、独自の出版局とは別に『紀要』をつうじて、犯罪研究所の初代所長インヘニエロスや2代目研究所長エウセビオ・ゴメス Eusebio Gómez は、現行法を手厳しく批判する論文や法改革案を発表しつづけた(23)。研究所のドクターたちは、早発性痴呆における脳皮質の細胞損傷、サイコセラピーの方法論、遺伝、ヒステリー、癲癇性昏睡といった純粋学問的な主題をあつかう諸論文となりあわせた専門家の領域をつうじて、学問領域から法律立案の実践へ介入しようとしていたのである。

研究所が設置されていた具体的な場の問題も想起しておこう。看守との最小限の会話をのぞいて他の受刑者との私話が許されない厳重に監視された静けさのなか、細微にいたるまで管理された時間割りのもと、「洗濯屋」「鍛冶屋」「電鑄屋」「仕立屋」等に配属された「工房」で労働をこなしていくことが強制されるオーバーン方式のブエノスアイレス刑務所で、犯罪者は、フーコー流に言えば、修道院生活と工場での規律・訓練を手本に社会のミニチュアとして作りだされた領域に監禁されていた(24)。一方的に眼差され、眼差しかえすことの許されないこれら受刑者の沈黙する身体は、さらに犯罪研究所の医学的規範のなかにひきわたされることによって、もうひとつ別の領域への監禁、すなわち医学的規範への監禁を強制されることになったのだ。社会的規範から疎外された者〈alienado〉であるという有罪判決を判事からすでに受けていた受刑者は、こんどは錯乱者〈alienado〉であるという判決を研究所のドクターたちから受ける。犯罪研究所は、〈受刑者—医者〉の関係を、〈判事—被告〉の階層的関係へと横滑りさせたの

だ。医者は、受刑者の身体を支配することをつうじて、審判官の特権を身に帯びるのである。

犯罪学研究所にならぶもうひとつの重要な装置は、ブエノスアイレス警察付属の「精神異常者観察」 Servicio de Observación de Alienados 別名「〈11月24日〉違反者預かり所」 Depósito «24 de Noviembre» である。ここでは、すでに犯罪をおかした者だけでなく、これから犯罪をおかす可能性があるとみなされる者や、はっきり精神異常と確認することはできないものの異常の可能性ありと判断される者が対象とされた。1902年から9年間にわたって観察業務の指揮にあたったインヘニエロスは、精神異常者観察を「公共サービス」とみなし、「その組織と機能の存在は、諸外国の大都市でも例外的なものだった」と自賛している。

精神異常者観察の創設を回顧するインヘニエロスの記述にしたがえば、これはインヘニエロスの同僚で、ラテンアメリカではじめて犯罪人類社会学の正規講座を開設したブエノスアイレス大学法医学教授フランシスコ・デ＝ベイガ Francisco de Veyga の主導のもと、法医学講座に付随する精神医学と犯罪学の臨床の場として構想され、市警察署長の協力を仰いで1900年に実現した。とはいえあくまでこれは、医学と法学の共通領域でなされる臨床の場であり、「治療と予防を目的とし、なんらかの精神錯乱に襲われた者や貧困者、家族に捨てられた者たちすべてを収容して、精神異常者＝疎外された者たちを観察し診断する」ことだけが純粹にめざされる施設である。犯罪学研究所と同様、精神異常者観察もまた、警察機関から独立した学問の場であると強調されたのである(25)。

しかしながら、精神異常者観察の助手をつとめ、のちにブエノスアイレス大学法学部の非常勤講師になるペドロ・バルビエリ Pedro Barbieri は、警察機関の代表的な刊行物『警察雑誌』 *Revista de Policía* とアルゼンチン医学界の権威ある雑誌『医学週間』 *Semana Médica* に1900年に掲載され、数年後には『紀要』に転載された論文のなかで、精神異常者観察は警察機関の末端組織をかねていたと証言している。

〈11月24日〉診療所の開業は、わたしたちの〔法〕学部において実証学派が決定的な承認をうけたことを示しているだけでなく、警察機関が実証学派を承認したことをしめしている。警察機関があたたかく歓迎してひきうけてくれたおかげで、すべての警察官吏から好意的な支援を表明されると同時に、末頼もしい協力を約束されて、

デ＝ベイガ教授は警察当局の出先機関のひとつのなかに自分の講座を設置したのである(26)。

警察活動と連動する精神異常者観察が対象とするのは、社会外的存在であることが明白とされる「専門的な犯罪者」や「狂人」以外に、こどもからおとなにいたるすべての年齢の「放浪者」、反抗的だったり喧嘩早かったりするコンパドリート *compadrito* [チンピラ]、アルコール中毒者、アトランテ *atorrante* [浮浪者] など、犯罪者や精神異常者と〈正常〉者とのボーダーにある人間たちである。かれらは、「より慎重で決定的な評価をください目的」のもと、精神異常者観察への「通常より長期にわたる逗留」を強制されたのである(27)。通常の警察機関の権限では直接関与することのできないこの領域に棲息する膨大な数の人間を、「観察」の名分のもとに連行するシステムによって、警察は監視のいきとどかない領域をカバーすることができただけでなく、警察組織の恒常的な人員不足を補うこともできた。

一方、学者たちはふんだんな臨床例を得るためのうってつけの場を提供されたことになる。ここに、警察機関と学的営みの互惠関係がはっきりとうちたてられるのである。たとえば、1900年のブエノスアイレス版以降、英語、フランス語、ポルトガル語、イタリア語に翻訳され、1912年には大幅に論文が追加されて決定版の出されたインヘニエロスの代表的論文集『犯罪学』*Criminología* は、著者自身述べているように、精神異常者観察と犯罪学研究所での豊富な臨床に基をおき、それに裏付けられていた。警察機構の協力に支えられたこれらふたつの「実験室」とそこでの観察の暴力なくして、国際的な評価の高いこの論文集は出現しなかったろう。

越境者のマッピング

ところで、学問の名のもとに、行政や司法当局との緊密なネットワークを組織だてた犯罪学は、その当初から移民のコントロールに照準をあわせていた。『近代犯罪学』への寄稿者でもあったルイス・マリーア・ドラゴ Luis María Drago は、アルゼンチンで犯罪学が展開したごく初期の1888年に開かれた司法人類学協会の講演のなかで、このように述べていた。

ですから、わたしたちは〔アルゼンチンの〕思慮のない、ほとんど無分別な寛大さのシステムに反発しなければならないのです。アルゼンチン共和国には、日々より多くの割合で移民がおしよせてきていることを思いおこしてください。もしかしたら、わたしたちの抑圧システムの寛大さと法的諸習慣のおかげで、この国は、警察のたえまない追及や、判事の断固とした厳格さに追われてヨーロッパから亡命してきた犯罪者たちの活動にとってはありがたい場所になってしまうかもしれないのです。

われらが大地を肥沃なものにすべく努力しようとやってくる誠実な労働者にたいしては、両腕を広げて迎え入れ、この大地を提供するのは良いとしても、移民の流れにまじって日々有害な諸活動の数を増やしている、ならず者や犯罪者の大衆にたいしては、予防策を講じることもまた必要なのです(28)。

この講演内容は『捕獲すべきひとびと』 *Los hombres de presa* の題名のもとに出版され、2年後にはロンブローゾの序章を加えたイタリア語訳『生来性犯罪者』 *I Criminali Nati* としてトリノで出版されている。都市住民をひとつのかたまりとみなす大衆論は、とりわけ犯罪学の領野では、〈移民大衆〉を〈良い移民〉と〈悪い移民〉に弁別する必要性として表出された。このドラゴの示唆を間接的にうけたブエノスアイレス管区警察の官吏ファン・ブセティッチ Juan Vucetich によって、一般市民に対する指紋押捺の義務化が構想され世界ではじめて実現されたのも、1912年におこなわれることになっていた男子普通選挙の実施にさきだって、それまで政治の領域から排除されていたアルゼンチンに帰化した移民に政治参加が認められることに対する、行政側の予防策としてであった。

そもそも、指紋による個人の同定は、イギリス植民地主義政策による流用の産物である。1870年代にベンガル地方フーグリー管区の1行政官が、ベンガル地方で古くから用いられてきた指紋で個人を区別するしかたに目をつけ、植民地経営の当地技術として用いることを企てたのである。最終的には、優生学者フランシス・ゴールトン郷 Francis Galton が、指紋識別をひとつの技術として体系だてた(29)。ゴールトンが指紋のなかに人種的な特徴を見だし、もって大英帝国の周縁を序列化し図表化しようとしていたころ、帝国の植民地主義的な欲望が展開されつつあった周縁のアルゼンチンでは、その知を統治実践のひとつのテクノロジーとして用いようとする動きが出現した。ブセティッ

チによる指紋識別システムの実践への応用である。

イギリスの植民地支配をうけているベンガルのひとびとから盗みとられたあるひとつの知の形態は、その知を有していたベンガルの被支配者を統治するための植民地主義的な技術としてふたたびかれらへとなげかえされた(30)。その一方でその知は、帝国の知の体系の周縁にくみこまれていた別の地域の支配的知識人によってひそかにもちだされ、流用され、現地で改良が加えられて、世界初の指紋による犯罪者逮捕という具体的な成果として結実されただけでなく(31)、犯罪者以外の一般市民へと拡大して汎用されようとしたのである。いいかえればこういうことだ。かたや西洋の植民地支配下にある地域で、指紋が統治の技術として用いられることにより、植民地支配をうけているひとびとはヨーロッパの知の体系の内部にマッピングされていった。だが他方では、直接的な植民地支配の外部におかれてはいても、まちがいなくその知の体系の内部にあったアルゼンチンをはじめとするいくつかのラテンアメリカ地域の支配層が、西洋植民地主義の尖兵と同じ身ぶりを反復していたのだ。19世紀前半には、大地や植生に対しておこなわれていたマッピング作業は、20世紀はじめには、人間にたいして、とりわけ国境を越えて移動するひとびとに対しておこなわれようとしていたのである(32)。

フーコーによれば、18世紀の末まで、受刑者の身体は華々しい権力のスペクタクルの展開される場であり、消えない烙印をそこに刻みつけることが権力の顕示であった。だが急速に権力の性質は、見えざる方向へ、隠された監視へ、精神の監視へと変化していった(33)。おそらく指紋識別法は、その権力技術の最たるものである。囲い込まれることも鎖でつながれることもなく、身体的苦痛もともなわない指紋押捺。1910年にアルゼンチンを訪れたジョルジュ・クレマンソーが、ブエノスアイレスの身分証明発行局の前に集まったひとびとを目撃していうには、「若者も老人も、おしだまって10本の指に靴墨のようなものを塗りたくっており、押捺が終わって石鹸の入ったお湯のなかで指先を洗っても、それは容易におちそうになかった」(34)。だが、容易におちそうにないのはインクではなく、指先の奇妙な形状をした黥のほうであり、身分証明局に登録された正確なそのコピーであり、苦痛の叫び声もスペクタクルな山場もなく「おしだまって」列をなすかれらの精神に烙印された意識のほうである。犯罪をおかしていようとしまいと、どのような人生をおくってこようと関係なく、きわめて平等かつ人道的に、全員がく受刑者となるのであるから。

それにしても、かつての身体刑が衰退し、あらたな処罰システムが発明され、やがて経済性＝組織性 *economie* をそなえた指紋押捺のような権力の監視と〈懲罰〉の技術が生まれてきた時期と、帝国主義が拡大していった時期が一致しているというのは、たんなる偶然だろうか。18世紀末以降の知の体系化のなかで、世界が均質なタブローのもとに再編成されていったのと同様並行して、植民地主義的な拡大は膨大な人と物と情報の流動化をもたらした。流動化のなかで接触し、交錯し、さまざまな抗争がおこり、それまではありえなかったような結合が生じる過程が短期間のうちに深化していった。帝国主義的言説の土台をなす知の体系は、このようにみずからの植民地主義的拡大そのものが産出するさまざまなあらたな状況を、たえずみずからの内部に組み込んでいかなければならなかった。他方でそれは、知の体系化をめざす技術をめぐる争奪戦が、ヨーロッパ内部だけでなくその外部でも展開され、文字どおり地球規模での空間と人間の序列化が進行していった過程でもあった。

いいかえれば、多様な接触のなかでつぎつぎと増殖していく未知なるものを統御し、その未知なるものが与える脅威や恐怖を飼い慣らしていくためには、均質な知のタブローそれじたいをより緻密なものにしていかなければならず、そのために、より隠れたかたちでの隠微な監視と官吏の技術が要請された。おそらくそのひとつの典型的な例が指紋押捺制度という、微細な物に着目しそれを解読するという洗練された知に裏付けられた〈人道的〉な監視の技術である。ここに、かつての人種類型による序列化に加えて、いまや個人のふるまいやその道徳的ありようを類型化して序列だてることをつうじて、人間を弁別し支配するためのあらたな知のシステムが編み出されなければならなかったのである。

抵抗の主体

先述したように、犯罪学的コンテクストのなかでとりわけ問題とされたのが移民であり、国境を越えるひとびとをいかに可視化してマッピングしていくかが、ブエノスアイレスの支配層にとってはとりわけ重要な課題であった。なかでも都市の移民は、やっかいな問題をもたらす存在とみなされた。フランスの心理学者ギュスターヴ・ル＝ボン Gustave Le Bon の1895年の作品『群衆心理』 *Psychologie des foules* に触発されて書いたとされる『アルゼンチンの群衆』 *Las multitudes argentinas* のなかで、精神病理学者で衛

生学者のホセ・マリーア・ラモス＝メヒーア José María Ramos Mejía は、移民をはっきりとふたつのカテゴリーに分け、都市の移民を「がまんのならない貪欲なく金びかブルジョア」 *burgués aureus* とする一方、地方に入植した移民については、純粋な魂をもった「子供」で、「常に穏和で明るく、けれど慎みぶかく、忍耐力があり、周囲の環境にはとても従順」な、「高貴なる清貧」を生きる「善良」で「素朴」な「パイーセ」 *paíse* [村人] とほめたたえた(35)。農牧業地域の移民を、支配層にとってまことにつごうのよい理想的な労働者であるかのように描いているのは、それとは異なって「群衆」を構成する都市の移民を脅威とみなしているからである。

都市の移民を問題化するこうした言説が、文化主義的な言説と接合されたことは容易に推測できる。1909年に出されて、後世まで影響力をもったとされる『国民主義の復古』 *La restauración nacionalista* のなかで、文学者リカルド・ロハス Ricardo Rojas は次のようにいっている(36)。

わたしたちの国に自分たちの法を創ってアルゼンチンの法を愚弄するのは、なにもユダヤの銀行家からなる外国人連合だけではない。いまやヨーロッパの諸議会は、法をうちたてたいと食指を動かしはじめているのだ。イタリアでは、ブエノスアイレスのイタリア人学校について、あたかも植民地学校 *escuelas coloniales* であるかのごとくに語られている。ドイツでも、同様のことがドイツ人学校について語られている。… [中略] …ここ、首都ブエノスアイレス [のドイツ人学校] では、カイゼルから助成金をうけ、ビスマルクやモルトケ元帥、ヴィルヘルム一世の胸像が据えられ、あたかもアフリカの植民地のような様相を呈しているのである(37)。

都市の移民を非難するにあたって、ことさらに植民地主義がもちだされているのはなぜか。アルゼンチンを、反植民地主義の抵抗の主体としてたちあげ、正当化するからである。しかし、ここにはひとつの重大な忘却があることは忘れられてはならない。独立以降19世紀末にいたるまで、アルゼンチン自体が〈荒野の征服〉 *Conquista del Desierto* と呼ばれる帝国主義的な政策をとってきたことである。フロンティア侵攻政策をさすその言葉に示されているとおり、それはいくつものインディオ諸民族とその土地を征服し、占有しようとする領土拡張政策であり、その政策のもとで、19世紀なかばから末にかけ

てアルゼンチンの領土は約2倍に拡大された。

しかも〈荒野の征服〉の軍事戦略を論じた支配層は、しばしばヨーロッパの植民地戦争での軍事戦略をお手本にした。たとえば、1878年の『エル・ナシオナル』紙上で、サルミエントは、「アルジェリアでビュジョー陸軍元帥がとりいれた新方式」を採用すべきだと主張していた(38)。それからほんの30年しか経っていないというのに、自分たちの植民地主義的な言説も軍事政策も忘却し、抵抗の主体としてみずからを構築しなおしているというのは、驚くべき集団的記憶喪失というほかない。しかも、そこでもちだされたのは、ほかでもない自分たちが破壊した「土着的要素」に対するノスタルジックな思い入れである。たとえばロハスはこのようにいっている。

わたしたちが災いの前夜にいるかどうかを誰かに明らかにしてもらわない必要などない。法外な数のイタリア人労働者たちがわたしたちの農場や牧場で働き、すさまじい量のイギリス資本がわたしたちの会社で動いていることを思い出すだけで十分だからだ。わたしたちを真の経済的従属におとしめるこうした人間と資本のコスモポリティズムのただなかで、土着的な要素は無関心へと捨て去られるか、そっけない評価しかうけないかのどちらかで、ほんの少しばかりの特権しか救済されてこなかった。こういったすべてのことがらも、ドラマチックな身振りで表明されればぞっとするものともなろうが、伝統的な精神のもの言わぬ悲劇の内なる苦悩は、外国の紫のマントによって覆い隠されてしまうので、表面的にはわたしたちは繁栄へと導かれてきたかのようにしかみえないのである(39)。

土着的なものに対する「帝国主義的ノスタルジー」(ロサルド)は、逆説的にも20世紀はじめのアルゼンチンでは、帝国主義に抵抗する主体というかたちで編制されたのである。

この時期、アルゼンチンの国民文学の正典として『マルティン・フィエロ』 *El gaucho Martín Fierro* が選びとられたのも、抵抗する主体としての〈土着的なわたしたち〉を構築しようとする言説編制においてであった。1913年にアルゼンチン文学講座がブエノスアイレス大学哲文学部に設置されるにあたって、ロハスは、『マルティン・フィエロ』こそは、フランスの『ロランの歌』 *La Chanson de Roland* やスペインの『わ

がシッドの歌』 *Poema de Mio Cid* と同じ国民的叙事詩だと評価し、さらに同年、文学者として名声を博していたレオポルド・ルゴネス Leopoldo Lugones は、大統領をはじめとする諸大臣の列席する異例の文学講演のなかで『マルティン・フィエロ』についてのレクチャーをおこない、この作品に同様の賛辞を送った(40)。また同じ年、文化的エスタブリッシュメントの雑誌『ノソトロス』 *Nosotros* も、著名な文学者にこの作品の〈国民的価値〉を問うて議論を加熱させたのだった。

「『マルティン・フィエロ』の価値は何か？」と問いかけ、「はたしてわたしたちは民族 *raza* の声がそこに響いているような詩節からなる国民的なひとつの詩 *una poema nacional* を本当にもっているのか？」と尋ねる『ノソトロス』誌のアンケートに対して、ブエノスアイレスの多くの主要な文学者が回答を寄せたという事実は意義深い。なぜなら、その問いかけに対して、肯定の身振りで答えようと否定の身振りで答えようと、そこには、民族の声が響く「国民的なひとつの詩」というものの存在を問う言説の磁場が構築されていることが示されているからである(41)。〈問いかけ—答える〉というこの審問の領域で、『マルティン・フィエロ』は、国民主義的な文学表現なるものの基準点として再配置されたのである。

しかしそれにしても、イダルゴをはじめとして、独立期以降、ガウチョの口承文化を自己領有した作品は他にも数おおく書かれてきたはずである。それなのに、なぜことさらに19世紀後半に書かれたこの作品が、国民的〈伝統〉の起源に据えられなければならないなかったのか。

文化の標本化

そもそも『マルティン・フィエロ』とは、ジャーナリスト出身の政治家で牧場主でもあったホセ・エルナンデス José Hernandez が、1872年に小冊子形式で出版した1篇の詩である。読者層が薄く出版事情のよくなかった当時でさえ、出版後2年で7版を重ねたといい、その成功をうけて7年後の1879年には続編『マルティン・フィエロの帰還』 *La vuelta de Martín Fierro* が出されたほどであった。

マルティン・フィエロという名のガウチョが苦しみに満ちた自分の半生を歌いあげる形式のこの作品のなかで、主人公はただガウチョであるという理由だけで権力者によって虐げられ、非人道的な扱いを受け、人間としてささやかな幸福を享受することさえ許

されてこなかったと訴えている。近代化を強引にすすめる抑圧をくりかえすパワーエリート
の不正義を暴露してガウチヨのおかれている状況を開示し、強権的な政策を批判する
という、道義的な観点からすれば正当とみえる犠牲者ガウチヨという表象が、出版当時
の知識人以外のひとびとのポピュラリティを得た理由と推測するに難くない。もっとも
1870年代の知識人には、逆にそれほど熱狂的には支持されなかったのであったが⁽⁴²⁾。

しかし、1910年代に入ってこの作品がとりわけ知識人のあいだで再評価されなけれ
ばならなかった理由は、まさしくここにある。近代的な権力に抑圧される牧畜民の口を
借りてみずからの人生の辛酸を歌うという形式のこの詩を読む読者は、そこに容易にナ
ルシスティックなかたちで自己同一化することができるからである。

しかもこの作品では、在りし日のガウチヨはこのようなものだったと回顧されてい
る。

そうして馬を馴らすあいだ
他の男衆は牧場に出ていき
家畜どもを追いあつめ
群れを駆りあつめ
そうして気づかぬうちに
興じる男衆の1日は暮れていく
 日がとっぷり暮れるころにや
男衆は厨房に集まって
ぱちぱちはぜる火を囲み
とめどなく語りあい
こんな愉快なおしゃべりが
夕餉のあとまで続いたもんだ
 腹もたっぷりくちてくりゃ
至福の時がやってくる
愛しいあの娘と手に手をとって
お偉方のように眠りにつく
翌日にはふたたびまた

前の日の仕事をはじめのために

ああ、思い出よ！ ……なんと素晴らしかったことだろう！

gaucho たちが 1 団となって

いつも愉快地に駿馬に跨り

仕事につこうとしたもんだ……

ああ、だがそれも今や昔……嗚呼！ (43)

圧倒的な力を行行使する近代的な勢力を批判しようとする『マルティン・フィエロ』の批判は、gaucho がおかれている同時代の社会不正を強調したいばかりに、もはや失われてしまった楽園的な過去を描き出すことに向かい、その批判のよりどころを現実にかくありしとは到底信じることのできない疑わしい文化表象に求めている。真正なる gaucho 文化といったものは、友情や家族の絆や家父長的な牧場主とのユートピア的な労働関係からなる過去の伝統的な生活文化空間にこそ存在するのであって、そうした伝統の外部には存在しない。つまりさまざまな社会的構成素を流動させ変化させる近代的な時空間は gaucho の真正性を汚染し破壊するという論理が、こうした文化像を貫いているのである。懐旧的な表現でなされるあらゆる批判の例にもれず、『マルティン・フィエロ』もまた、資本主義的な変化を情緒的に非難するためのよりどころとして gaucho 文化の伝統をもちだしているのである。だが、この情緒に訴えるレトリックこそが重要なのだ。抵抗の主体という言説が政治的な力をもつのも、このような情緒のトポスにおいてほかないからである。

失われた過去を嘆き、その過去にノスタルジックに思い入れることをつうじて、同時代の変化を批判するといった情緒的なレトリックは、他方では gaucho 文化を、変容することのない、変容することの許されない時空間のなかに閉じこめて愛玩することと同義である。このような文化の囲いこみへの欲望は、作品執筆にあたって出版元の編集者 ホセ・ソイロ・ミゲンス José Zoilo Miguens にあててしたためられた書簡のなかでつまびらかにされているが、エルナンデスはそこで、この作品を書いた目的は、「文明の征服過程のなかで絶滅していってしまう、われらがパンパに生きる独自の人間類型の肖像画を描くこと」にあると言明していた(44)。すなわち瀕死の状態にある土着の文化を標本化して、それを「われらがパンパ」つまり〈わたしたちアルゼンチン国民〉の伝統とし

て保持することが、エルナンデスにとっては重要だったわけである。

しかしながら、『マルティン・フィエロ』が出された1870年代は、すでに社会の急激な流動化がはじまっていた。戦争や産業化や移民政策などにより、都市には数多くの牧畜労働者が流入し、また内陸には移民が入植していたにもかかわらず、こうした時期に犠牲者ガウチョという表象を用いながら、古き良き時代を語る。じつはそれは、都市に移動流出する内陸民を真正性を失ったガウチョとして否認し、他方で内陸に流入してくるヨーロッパ移民を「グリンゴの連中ときたら／馬ののりかたも知らず」「鞍のつけかたも分からなきや／牛の畜殺のしかたも知らず／わしは何度もこの目で見たが／倒された牛の側にゃ／寄りつきもしないありさま」(45)として排除することによって文化に線引きをするという、文化の所有権を画定する身ぶりと表裏をなしてしまうのである。

文化の閉鎖性を強調し、その生活スタイルや伝統は外部の人間には共有されないと主張することによって、〈グリンゴの文化〉と〈ガウチョ文化〉がともに排他的な文化であるとする前提が、あたかも自明であるかに表象された。このように文化的な差異を強調することをつうじて、流動化しつつある状況のもと、異なる出自の人間どうしのさまざまな結びつきや関係性のとりむすびが可能であったらうはずの社会空間は、文化的にゲッター化され硬直した社会空間であるかのごとく表象されたのである。エチエンヌ・バリバルは、そのすぐれたエッセイ「〈新人種主義〉は存在するか」"Is There a 'Neo-Racism'?" のなかで、文化主義に支えられているこのような表象戦略は、すでにひとつの人種主義的言説であると述べている(46)。

本来多様であるはずの社会関係を、文化的な差異という意匠の本質論によって決定される集団間の関係性へと回収してしまう言説。生物学的な属性でなく文化にもとづくこの人種主義的言説は、表面的にはあたかも従来の白人至上主義の人種論を批判し、社会的な〈弱者〉たるネイティヴを救済する言説であるかのようにみえる。『マルティン・フィエロ』が、あたかも被抑圧者の声を代弁した作品であるかのように評価されたのは、このためである。だが重要なのは、抵抗の主体として土着的な文化を構成し、ましてやそれを国民文化のひとつの古層として認知しなおすことがいかなる政治的な意味をもっていたかを検討しなおすことである。

『マルティン・フィエロ』が正典化された1910年代とはまた、国民文学というカテ

プリーの構築⁽⁴⁷⁾、民俗学研究の制度化⁽⁴⁸⁾、さらには、〈新歴史学派〉 Nueva Escuela Histórica と呼ばれる国民史学派の形成⁽⁴⁹⁾といったように、さまざまな分野の学問が、国民的なものや土着的なものを問い、探究し、その問いに答えようとする国民主義的審問の言説領域で再編成されていった時期であった。それはおそらく、1912年に制定された男子普通選挙法によって、ブエノスアイレス在住する帰化した移民たちに政治参加が認められ、その4年後におこなわれた初の大統領選挙のもとで、ブエノスアイレスの中産階級に広く支持されて急進党政権が樹立した状況と無関係ではありえない。アルゼンチン初の短期間の民主主義的な時代とされてきたまさにその1910年代から20年代末において、国民主義的審問の場を用意する言説の領野が形成され、そのなかで、文化主義的人種主義による隔離政策の学問装置がつくられていったのである。この点が見おとされてしまうなら、30年代以降のいわゆる「ファシズムの時代」やその後の「ポピュリズムの時代」は、それ以前の「民主主義の時代」のたんなる〈反動〉としてしかとらえることはできなくなる。だが、おそらくそこにあったのは、政治的〈反動〉や歴史的〈逆説〉というかたちで説明されるような言説の亀裂というより、連続性である。

そして、こうした世紀初頭の国民主義的審問の言説領野を構成していったものこそは、人や物や情報が接触し、交錯し、弁別不能なかたまりとして都市空間を見だし、精神病理学や犯罪学といった科学的な知のテクノロジーを武器に、そこに介入していきうとした眼差しだったのである。

ところが、奇妙なことに、まさにその犯罪学的なテキストのなかに、文化的な差異による区分けがあたかも自明であるかのように見せる言説とは異なる叙述が書き込まれている。「犯罪的虚栄」"La vanidad criminal" という論文のなかで、インヘニエロスは、1900年頃のブエノスアイレスの状況をこのように回顧している。

1900年、新聞や舞台に煽られて、ブエノスアイレスでは、〈モレイラ主義〉"moreirismo" の疫病が流行った。ときどきブエノスアイレス市の郊外では、暗黒世界 mala vida のどこぞの人間が… [中略] …ふだんの服装に、古めかしいガウチョ流の服装のなんらかの象徴をつけ加えたり、警察にたいして決然と抵抗しようとしたのだった。ギターをたずさえるというおきまりの格好で——とはいっても一般にかれらはギ

ターを弾くことはできないのだが——、バリオ [下町] のマトン [ギャング] は、ほとんど例外なくカタルーニャかイタリアの出版所が編纂した質の悪い詩の小冊子で習い覚えた、いわゆる「伝承的な」"tradicionalista" なにかのデシマ [10行詩] を、調子はずれの声で歌いながら、アグアルディエンテの売場をめぐり歩きにでかける。警察がかれらを牢獄におち込むまえに、どこぞの探偵もののノンフィクション作家たち cronistas policiales は、大量流通している新聞のなかで、かれらをつごうのいい宣伝広告にしまうのだ⁽⁵⁰⁾。

重要なのは、犯罪学のようにきわめて抑圧的なテキスト空間のなかに、〈都市の文化〉対〈地方の文化〉、〈移民の文化〉対〈ガウチョの文化〉〈病的な文化〉対〈健康な文化〉といったような、文化主義的人種主義に支えられた二項対立の言説を自明のものにしようとする歴史主義のほころびが、書きこまれてしまっていることである。アドルフォ・プリエトによれば、プリエトが「民衆的クリオジスモ」 criollismo popular と呼ぶこの社会的なあらわれは、これ以後書かれた文学史のマニュアルでは完全に黙殺された。また、レオポルド・マレシャル Leopoldo Marechal やホルヘ・ルイス・ボルヘス Jorge Luis Borges に代表される1920年代のアヴァンギャルド文学のなかにひそかにもちこまれ、歴史的コンテクストを拭い去られ⁽⁵¹⁾、あるいは、〈移民の言語〉が構成する「偽りのクリオジスモ」と〈アルゼンチン＝スペイン語〉によって表現される「正統的クリオジスモ」のあいだに、再度文化的な線引きがおこなわれた⁽⁵²⁾。しかし、のちの支配的な文化言説からは排除され、消し去られようとした都市民の身ぶりや「調子はずれの」歌声が、同時代の排他的な学問の専門論文のなかに書きこまれているのである。

またここには、あるひとつの歴史的な逆説とでもいうべき事実が示されている。つまり、独立以来、アルゼンチンの国民主義的同一性を正当化する文化的な自己表象は、ガウチョの口承的な表現形態を印刷文化に自己領有することをつうじて企てられてきた。しかしながら、まさにそれが印刷文化に自己領有されたことによって、それは、ある均質な言語空間を共有してきた人間諸集団なるものを前提としなくともよい別の可能性をひらいてしまったことである。印刷文化の領域を経ることをつうじて、習い覚えることが可能であるということ。しかもそこで習い覚えた文化的表現をつうじて、支配的な社会言説におもねりすりよるのでなく、支配的言説を苛立たせる薄気味悪い社会的結合の

潜在的 가능성을予感させていること。それが、ここには露呈されているのである。

むろんこれとて、あるひとつの社会現象をリアルに写しとったものとして理解してはならない。そもそもインヘニエロスのこの文章は、当初ローマで出版され、3年後にブエノスアイレスで再版された『科学の周辺で』 *Al margen de la Ciencia* に所収された「旅の記録 (1905~1906年)」 "Crónicas de viaje (1905-1906)" のなかの1篇として発表された。しかしその段階では、1900年のブエノスアイレスのエピソードについては触れられてはいない⁽⁵³⁾。のちにインヘニエロス自身が加筆した段階で、レトロスペクティブな視点から書かれたものである。しかし、そうであるからといって、これをまったくの虚偽と断定することもできないだろう。

おそらくここに示されているのは、二項対立的な枠組みで社会空間を区切り、弁別し、整理することによってあるひとつの社会の全体像を見通しのよいものにしようとする言説が成立することによってはじめて析出されてくる奇妙な逸話である。この逸話は、組織だった民衆反逆としてあらわれるわけではないし、なにかひとつの民衆精神と似たようなもののあらわれでもない。また、民衆文化なるものと土着文化なるものが混ざりあって、ひとつのまったく新しいひとつの文化をつくりあげているというわけでもないし、かといってゲッター化された複数の文化が束になっている現象が示されているわけでもない。あえていうなら、複合的な文化的表象の場が、ここでは見いだされているのである。だが、こうした複合的な表象こそは、支配的な二項対立の言説が排除しようとしていたものではなかったか。このように考えてくるとき、犯罪学のような抑圧的なテキストでさえ、一方的な抑圧の力の分析素材としてではない、別の読みの可能性があるように思われる。もしかしたらそれは、「グランジ」の読みとして論じてきた読解の可能性とどこかで通じるものであるかもしれないのである。